

## 歩き遍路体験に伴う感動が人間的成長に及ぼす影響

—— 学生による創作俳句600句に詠み込まれた情景と心情の分析から ——

皆川直凡\*, 佐々木智美\*\*

(キーワード: 歩き遍路, 感動, 俳句, 人間形成, 情動知能)

### 序論

皆川・正岡(2008)は、人間は、さまざまに変動する状況の中で自ら気づく感性、自ら選択し判断し決定し行動する知性、そして人間関係を築く力を必要とし、人間関係を築く力の育成には、会話力の向上など外的対人関係能力と自己や他者のよさを認める気持ちをもつなどの内的対人関係能力の両面からのアプローチが必要であると述べている。また、佐々木・皆川(2013)は、人間的な成長にとって重要な体験として感動体験をあげている。歩き遍路に伴う感動も、人間的成長に重要な意味をもつと考えられる。なお、この感動について、戸梶(2001)は、心理学の分野での研究は進んでおらず、日本語でいう感動という名詞表現が英語圏には存在していないのがその理由であると述べている。そして、同論文の英文タイトルやその後の英語論文(Tokaji, 2003)では、“The State of being Emotionally Moved”(情動的に心が動かされた状態)と表現している。これらの問題に示唆を与える取り組みとして、人間の健全な成長に良い影響を及ぼすメディアとして、季節の風物を主題とし、日本語の美しさを感じさせ、日本発信の短詩型として知られる俳句に注目し、自らの感動体験を表現することを奨励してきた、第1著者らの教育研究(皆川, 2012; 皆川・横山, 2013)があげられる。俳句の創作と鑑賞をとおして周囲の状況に気づき、自己を見つめ他者と関わり合うことで、理解力、表現力といった知性や、人間関係を築く力の育成が促進されると考えられる(皆川, 2005)。知的・論理的なものがあまりに先行して子どもの感性・感情の面がなおざりにされかけている時代に俳句の効用が意識され、地域・学校で俳句の学習が行われているのも事実であり、俳句をとおした活動で子どもが認められる楽しさを経験する例も報告されるようになった(俳人協会, 2001)。

社会的存在である人間のこころ(知・情・意)の科学的理解を目指す心理学の観点から、歩き遍路体験は、途上の自然や文化、そして人間(同行者、地域住民)との交流から、自己を見つめ直す好機と考えられる。先行研究では主として、感情や意欲の変化が検討されてきたが、ここでは、認知の変化にも着目する。体験の意義は、心に刻み込んだり思い返したりすることにより、いっそう深まる。日本人は、自然、文化、そして人間との交流を心に刻み込む手段として、俳句という短詩型を創造し、世界に向けて発信してきた。自らが体験する出合いを季語と結び合わせることによって俳句が生まれる。遍路の途上でも、数々の俳句が詠まれてきた。

第1著者は、このような理解に基づき、感性と知性の科学である認知心理学の知見ならびに方法論を教育に応用するという視点から、「四国の文化アイデンティティである遍路の心を日本発信の短詩型である俳句によって表現する」という到達目標を掲げて、本学の大学院ならびに学部の授業において下記のような教育プログラムを数年にわたって実践してきた。歩き遍路を主体とする体験型の授業において、その途上で出会う風物や、同行者や地域の人々とのふれあいをテーマとして俳句を作ることを提案し実践してきたのである。歩き遍路に先立つ事前授業では、俳句の面白さ、豊かさは、有季定型によって生み出されるという考えを明らかにし、その仕組み(十七音のリズム、季語)について説明してきた。また、若い人はフレッシュな感性で率直に詠むことができ、人生経験を積んだ人には深い味わいがにじみ出てくるというように、それぞれの良さが自然に現れること、誰が詠むにしても、その根本に季語があることについても言及してきた。さらに、以下のように述べ、歩き遍路での俳句の創作を奨励してきた。「遍路の途上では、さまざまな風物に出会う。句の食材にも出会う。その一つ一つが季語なのである。歩き遍路は俳句をつくる絶好の機会であるといえる。この機会に、自分自身の心のかたち

\*鳴門教育大学人間形成コース

\*\*鳴門教育大学予防教育科学センター

を、俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみよう。」

上述の教育プログラムは、学部では「阿波学」という名称の授業の中で2008年度より継続して実施し、2013年度にも実施した。また、大学院では、学部に先立ち2007年度より、大学院授業科目「四国遍路と地域文化」のなかで継続して実施し、2013年度にも実施した。本研究は、これらのうち、先ず2007年度より3年間に歩き遍路に参加した学生が創作した俳句に含まれる心情を分析し、上記の教育プログラムの成果を検証することを目的としている。なお、皆川（2011）は、俳句そのものではなく、俳句の読者による鑑賞文や作者による解説文の分析を行うことで検証を試みたが、本研究では、俳句そのものの分析を行うことで検証を行う。

## 方 法

授業内容の詳細（事前授業の内容、俳句の指導方法、歩き遍路の方法など）は、先の論文に詳述されているため、ここでは、主として俳句の分析方法について記述する。

**研究協力者** 2007年度「四国遍路と地域文化」受講生46名（男性32名、女性14名）、2008年度「阿波学」受講生99名（男性39名、女性60名）（うち学部生92名（男性37名、女性55名）、大学院生7名（男性2名、女性5名）、2008年度「四国遍路と地域文化」受講生16名（男性14名、女性2名）、2009年度「阿波学」受講生66名（男性32名、女性34名）、2009年度「四国遍路と地域文化」受講生13名（男性8名、女性5名）が俳句を提出し、研究協力者となった。その結果、俳句提出者すなわち研究協力者総数は、240名（男性125名、女性115名）となった。なお、大学院生の研究協力者のうち26名（男性18名、女性8名）が現職教員であった。

**創作俳句・分析対象** 2007年度と2008年度は3句、2009年度は2句の提出を求めた。実際には、提出句以外の自作の句を取り入れてレポートを構成している受講生も多く、この取り組みにより、本研究の対象年度とする3年間で240名の作者により合計713句の俳句が提出された。このうち、季語のない作品、季語はあるが当季（秋または夏）ではない作品、季語を羅列した（三つ以上使用した）作品、単なる語呂合わせに終始している作品、一部の語句の表記形態を変えただけの作品（漢字をカタカナに変えるなど）、および既存のフレーズを借用している作品を除く600句を本研究の分析対象とした。分析対象とするか否かの判断は著者2名がまず個別に行い、一致しないところは、話し合いによって決定した。

**俳句の構造の分析** 俳句は、構造上、基本的に、上の句（最初の五音）、中の句（真ん中の七音）、および下の句（最後の五音）に分かれており、一般にこの三つの部分は、俳句の実作者あるいは評論家によって「上五」、「中七」、「下五」と呼ばれている（Minagawa, 2008）。以下、本研究でも、この呼称を採用する。俳句の内容の分析にあたり、まず、著者2名の話し合いにより、創作俳句の季語を抽出し、季語が上記のどの位置に含まれているかについて検討した。なお、この分析は、著者2名がまず個別におこなったうえで結果を開示し合い、一致しないところは、話し合いによって決定した。

**季語の使用頻度の分析** 上記の分析を受けて、それぞれの季語の使用頻度を調べた。

**俳句の内容の分析** 著者2名の話し合いにより、下記の2つの観点によって俳句を分類し、俳句に詠み込まれた作者の心情を分析した。はじめに、俳句に詠み込まれた対象、すなわち俳句の主題別に分類した上で、人間を主題とする俳句に関しては、Emotional Intelligence（情動知能：情動を知覚し、思考を助けるために利用し制御する心的能力・特性；島井・大竹、2001）の概念に沿って分類した。分類の観点ならびに手順は下記のとおりである。まず、それぞれの俳句に用いられた季語を歳時記の区分にしたがって分類した。季語を手がかりとして、俳句の主題を、「自然（時候・気象、天文・地理、動物・植物など）」、「人間（自己、仲間や地域の人々など）」、「文化（生活・行事、寺院、史跡など）」の三つに分類した。この分類は著者2名がまず個別に行い、一致しないところは、話し合いによって決定した。俳句の主題を分類する際、上述のように、季語を手がかりとしたが、自然や文化を主題とする季語が用いられていても、作者とその周辺の人物が主題となっている場合があり、その場合は、自然や文化ではなく、人間を主題とすると認定することにした。

つぎに、上述の段階で人間を主題とすると認定された俳句について、Emotional Intelligenceの概念に沿って作者の心情を読み取り、自己対応の俳句（自己の心の状態を察知したり、それを表現したり、必要に応じてコントロールしたりすることへの感動を詠んだ作品）、他者対応の俳句（共感したり、励まし合ったり、協力し合ったり、助け合ったり、感謝したりすることや、それに伴う感動を詠んだ作品）、および状況対応の俳句（その場の状況や雰囲気を感じ、それに対処することや、それに伴う感動を詠んだ作品）に分類した。この分析も、著者2名がまず個別におこなったうえで結果を開示し合い、一致しないところは、話し合いによって決定した。

なお、Emotional Intelligence という用語は、情動知能、感情知能などと訳され、喜怒哀楽に代表される感情の問題であるにとらえられがちであるが、島井・大竹（2001）は上述のように、思考を助けるという側面に着目した定義をおこなっている。したがって、本研究においても、歩き遍路に参加した学生が途上の風物や自己の体験をどのようにとらえ、それらとおして気づいたことや感じたことをどのようにして十七音に集約して表現したかという認知や思考の側面も含めて考えることにした。その過程で、十七音という制約の中で、表面上は歩き続けることに伴う疲労や身体の痛みのことしか描ききれていない作品であっても、そのことについて何かを感じたり考えたりした結果が反映されていると判断し、Emotional Intelligence の概念に沿った分類を試みることにした。

## 結果および考察

**俳句の構造（季語の位置）** 上五に置く俳句がもっとも多く、全600句のうち335句（55.8%）を占めていた。次いで、下五に季語を置く俳句が多く、256句（42.7%）であった。一方、中七に季語を置く俳句は69句（11.5%）に過ぎなかった。なお、季語が二つある場合はそれぞれカウントした。このため、季語の総数は創作俳句よりも多くなり、比率の合計は100%を越えることとなった。このように、上五もしくは下五に季語を置く俳句が大半を占めたことは、創作法として、以下の二つのパターンを指導したことに起因すると考えられる。①上五に五文字（五音）の季語をおき、季語とは直接関係がない十二文字（十二音）の文を続ける、②十二文字（十二音）の文のあとに、五文字（五音）の季語を置く（指導法の詳細は、皆川（2011）に記載されている）。

**季語の使用頻度** 多く用いられた季語とその頻度を使用位置別に算出し、Table 1 に示した。

Table 1 多く用いられた季語とその使用頻度

季語	上五	中七	下五	全体
秋遍路（秋へんろ）	61	0	48	109
彼岸花（ひがんばんな）	13	0	23	36
曼珠沙華（まんじゅしゃげ）	7	0	18	25
秋風（秋の風）	27	4	13	44
秋の山（秋山）	23	0	8	31
秋の空（秋空）	8	4	15	27
赤とんぼ <sup>*1</sup>	12	0	15	27
秋桜（コスモス）	14	6	3	23
稲（イネ）・稲穂 <sup>*2</sup>	3	7	8	18
爽やか（さわやか）	9	1	7	17
秋の雨（秋雨）	11	0	6	17
秋晴	14	0	0	14
案山子（かかし）	2	2	7	11
虫の声	4	0	7	11
螻蛄（かまきり）	9	0	1	10

※1 赤とんぼには、「秋茜」が1句含まれていた（位置は、上五）。

※2 稲には、上記の他、「稲刈る」、「垂れる稲」などの変型があった。

学生の創作俳句600句のうち、季語としてもっとも多く用いられたのは、「秋遍路」であり、109個の作品において、この季語が用いられていた。うち、2句が「秋へんろ」という表記法を用いていた。この語はこの授業の内容（受講生の体験）をもっとも端的に表す季語であり、全体の実に6分の1強の作品において用いられていることから、自らの体験を俳句にしようとする意欲が感じられる。また、受講生にとってこの体験がいかに印象深いものであったかが読み取れる。俳句の構造との関係では、この季語を上五に置く場合が61句、下五に置く場合

が48句であった。ちょうど五音で表される季語であることから、上五と下五で扱いやすく、中七に置くことが難しかったものと推察される。上五に置かれる場合が多いが、これは先ず「秋遍路（秋へんろ）」と書くことから始め、次にその後に関連して思い起こされる情景や自己の体験を十二音で表現することで俳句として完成させるという創作過程が想像される。下五に置く場合には、途上で見た情景や自己の体験を先に十二音で書くという手法がとられ、その情景や体験が遍路という行為に適合すると判断した場合に、「秋遍路」という語で作品を締めくくるといった創作過程が想像される。

また、「彼岸花（ひがなばな）」が36句、「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」が25句で用いられており、両者は同じ花の別名であることから、61句においてこの花が詠まれていたことになる。実際、途上の畦道などによく咲いており、周囲と比べて色彩的にも目立ち（多くが赤色であるが、白色もある）、非常に印象深い花であること、さらに上記いずれの書き方をしても五音で表されることが使用頻度を高めた理由であると考えられる。俳句の構造との関係では、「彼岸花」を上五に置く場合が13句、下五に置く場合が23句であり、「曼珠沙華」の場合はそれぞれ7句、18句であった。中七では用いられないという点で、上記「秋遍路」と共通しているが、違いも見いだされる。つまり、「秋遍路」の使用される位置が下五よりも上五がやや多い程度であったのに対し、「彼岸花」・「曼珠沙華」では、明らかに下五での使用が多かった。周囲の情景や自己の体験や心情（歩くことの厳しさ・苦しさなど）を描いた後に、対比させる形でこの季語を置くという創作過程が想像される。

使用頻度第3位は「秋風（秋の風）」の44句であった。「秋風」と「秋の風」は同じ意味だが、文字数（音数）異なり、俳句での用い方への影響が予測される。そこで、俳句の構造との関係を見ると、「秋風」を上五に置く場合が17句、中七に置く場合が4句、下五に置く場合が2句であった。「秋風は」、「秋風の」、「秋風や」などのように、最後に一音加えることで五音とし上五で用いるというのが一般的な用い方であることを示す結果である。しかし、「秋風」は四音であるが故に、あと一音ないし三音加えることで、中七でも下五でも用いることができるのである。一方、「秋の風」では、使用が上五（10句）と下五（11句）に限られ、同じ五音の季語である「秋遍路」や「彼岸花」・「曼珠沙華」との共通性が認められた。

以下、「秋の山（秋山）」が31句、「赤とんぼ（赤蜻蛉）」が生物学的に同種と考えられる「秋茜」1句を含めて27句（「とんぼ」全体で数えると31句）、「秋の空（秋空）」が27句、「秋桜（コスモス）」が23句でそれぞれ使用されていた。さらに、「稲（イネ）・稲穂」とその変型が18句、「爽やか（さわやか）」が17句、「秋の雨（秋雨）」が17句、「秋晴」が14句、「案山子（かかし）」が11句、「虫の声」が11句、「蟻螂（かまきり）」が10句で使用されていた。ここまでが、10句以上の俳句で使用されていた季語である。いずれも秋の風物詩として名高く、本授業における歩き遍路の途上でも印象深い季語である。これらの事例により、上記の考察を検証すると、「赤とんぼ」（上五12句、下五15句）、「秋の山」（上五22句、下五8句）、「秋の空」（上五7句、下五15句）、「秋の雨」（上五6句、下五6句）、「虫の声」（上五4句、下五7句）といった五音の季語は専ら上五と下五で用いられ、四音の季語「秋桜（コスモス）」（上五14句、中七6句、下五3句）は中七でも用いられるという結果が得られた。「秋山」（1句）、「秋空」（5句）、「秋雨」（5句）は、それぞれ「秋の山」（30句）と「秋の空」（22句）、「秋の雨」（12句）と比べて圧倒的に少なく、上述の「秋の風」と「秋風」のような比較はできなかった。また、同じ四音の季語でも、「秋晴」（上五14句）は上五のみで用いられ、「爽やか」（上五9句、中七1句、下五7句）で用いられた。これには前者が名詞で、後者が形容詞であるという品詞の違いが関わっていると考えられる。前者は「秋晴の」、「秋晴や」といった形で上五に置かれやすく、後者は「爽やかな」、「爽やかに」、「爽やかや」などと語尾を活用させることによって、どの位置に置くこともできるのである。さらに、三音の季語である「案山子」は、「案山子かな」や「田のかかし」などとして下五で多く用いられ、切字「かな」の活用が認められた。上述の「稲」も、「稲刈る」、「垂れる稲」という創意工夫をもって各位置に置かれているのであり、これらを考え合わせると、工夫次第で創作の可能性が広がることが示唆される。

なお、「蟋蟀（コオロギ）」、「鈴虫」、および「松虫」を季語とした作品が合わせて6句あり、ほかに「虫の音（ね）」という表現を用いた作品もあり、これらを主として鳴き声を愛でる対象として「虫の声」に算入すると、合わせて18句となる。また、「銀杏（ぎんなん）」、「栗」、「団栗（どんぐり）」などの「木の実」や「草の実」が合わせて16句あり、「柿」、「酢橘（すだち）」といった「果物」が合わせて10句あった。

**季語以外の語句の特徴的使用** 俳句は季語だけで成り立つものではなく、他の語句といかに組み合わせるかが作品としての善し悪しを決めるポイントとなる。そこで、「歩き遍路」という主題との関連において、どのような語句が使用されているか、検討する。その際、語句のレベルでも検討するが、「歩く」と「歩き」の關係に象徴されるように、ある漢字がさまざまな形で使用される可能性があることから、文字のレベルでも検討することと

する。はじめに検討したいのは「遍路」という語句の使われ方である。各種の歳時記によれば、「遍路」は春の季語であり、他の季節に詠むためには、「秋遍路」のように季節名を冠するか、もしくは別の季語を入れる必要がある。遍路という語が含まれる語句（「お遍路さん」、「遍路杖」、「遍路道」など）は単独で春の季語となるが、ほかに他に季語を入れても季重なりとはせず、他の季節の俳句として認めるということが俳句界の常識となっている。今日、実際に他の季節にも歩き遍路が行われており、他の季節に行われる遍路の情景や体験を俳句にするためには、そのことを認める必要があるからである。とりわけ秋は、気候条件のよさから、春に次いで多く歩き遍路が行われる季節である。本授業における歩き遍路は9月下旬におこなわれるため基本的には秋の遍路であることから、俳句の創作指導にあたり秋の季語を用いることを奨励している。このことは、事前授業や宿泊先での指導・助言の機会に説明しているが、それでも、春の季語である「遍路」のみを季語として俳句を創作する学生がおり、このことが冒頭で示したように、分析対象となる俳句が713作品から600作品に絞り込まれる原因の一つとなっている。夏の暑さが残っていることから夏の季語を用いる学生もいるが、これに関しては時期的に接近していることから許容範囲となる。しかし、この時期に春の俳句は容認できないのである。このとき、秋の季語が使用されない主要な原因となっているのが、「遍路道」という語句の使われ方である。学生にとって、歩き遍路といえば、険しい山道や、平地であっても長い道のりを歩くという実感があり、さらには途上の至る所に「遍路道」という案内表示があることから、どうしてもこの語を使うことになるのである。そして、「遍路道」という言葉を入れることで、歩き遍路の俳句を作ったという満足感が生まれ、その結果、秋の季語を入れることを忘れることになると考えられる。分析対象として選出した600句、つまり秋（または夏）の季語が用いられている俳句のうち、「遍路道」という語句を使用した作品は81句にのぼる。36句が上五、1句が中七、44句が下五で、「遍路道」を使用していた。これらの俳句を読み、「遍路道」という語句が使われている位置と、季語の位置との関係を検討した。「遍路道」は五音なので、たとえば、この語を上五に使用すれば、季語は必然的に中七もしくは下五で使われると考え、その検証を試みたのである。「遍路道」が各位置に置かれた際、どのような季語がどの位置に置かれるかをその使用頻度とともに調べた結果をTable 2に示す。

Table 2に示すように、季語の分析において実証した、五音で構成される語は上五または下五で用いられやすいという事実は、「遍路道」という語句に関しても検証された。「秋」という季節名を冠した季語を使用する場合もあるが、それ以外の季語も多数用いられていた。使用された季語の領域も、一般的な歳時記の区分における時候、天文、地理、動物、植物、生活の各領域にわたっており、遍路の途上で実際に出会った風物をそれぞれの視点で詠み込みことに成功した作品群を確認することができた。

「遍路道」以外にも、「山道」、「里の道」、「歩む道」、「道標」など「道」という漢字を使用した作品が多数生み出された。「遍路道」以外の「道」を織り込んだ作品の数は、上五11句、中七7句、下五17句の計35句あり、参加者の「道」に対する関心の高さをうかがい知ることができる。とりわけ、「山道」8句、「山の道」3句、「下山道」1句で、計12句を占めており、遍路道の特徴を物語っている。これに関連して、「歩」という漢字が計27句（上五9句、中七6句、下五12句）で用いられており、上記の文脈で考察しうる。また、「疲れ」という語句の使用が上五で4句、中七で10句あった。一方、中七では、「心」という語が20句、「思い」が6句、「声援（応援）」が6句、「励」が3句でそれぞれ出現し、下五では、「背中押す」が4句、「力増す」が1句、「癒し」が5句でそれぞれ出現していた。さらに、「私」、「ぼく」、「我」といった一人称語が中七では10句、下五では7句でそれぞれ出現し、「君」、「みんな」、「友」、「仲間」といった語句が、中七では5句、下五では7句でそれぞれ出現していた。これらの事実から、疲労感がしだいに達成感に変わっていく心情の変化を読み取ることができ、その変化には遍路途上における仲間との協力関係ないしは協同体験が寄与していることが推察される。また、季語としての使用頻度の高さから、「赤とんぼ」、「かまきり」などの小動物が懸命に生きる姿に共感し、「彼岸花」、「コスモス」といった花々の美しさや可憐さに感動し、「秋の空」や「秋風」のすがすがしさに後押しされたことなども歩き遍路参加者の心情の肯定的変化に寄与したと考えられる。さらに、たわわに実った稲を見守る「案山子」、それぞれの時代の巡礼者を支援してきた新旧の「道標」に注目し、勇気づけられた者もいたと思われる。

**固有名詞の使用** 四国遍路と地域とのつながりを考えるという授業趣旨から、ゆかりの人物や、寺の名前に代表される、各地の固有名詞がどの程度意識されているかは、興味深い。しかしながら、全600句のうち、固有名詞を取り入れた作品は34句にすぎなかった。11句では上五、23句では下五に取り入れられており、中七では、固有名詞は、使用されなかった。これまでの議論との関連でいえば、四国遍路の寺名は五音であることが多いため、上五か下五に取り入れられる結果となったのではないかと考えられる。個別にみると、四国遍路の始祖・空海が5句で詠まれていた（お大師1句を含む）。地藏や仁王様の名前を取り入れた作品も、1句ずつあった。寺の名

Table 2 「遍路道」と組み合わせられた季語とその使用頻度

「遍路道」 の位置	季語の位置									
	中七		下五				上五			
	季語	頻度	季語	頻度	季語	頻度	季語	頻度	季語	頻度
上五	虫の音	1	秋の暮	1	冷やか	1				
	いがぐり	1	秋の空	1	鱗雲	1				
	どんぐり	1	秋の風	1	赤とんぼ	5				
	イモ	1	秋の雨	1	虫の声	1				
	残暑	1	秋の宿	1	彼岸花	5				
	汗	1	秋さそう	1	曼珠沙華	2				
			秋を見る	1	稲・稲穂	3				
			秋の季語	1	秋桜	1				
					案山子	1				
					日焼け	2				
中七						ひがんばん	1			
下五	秋風	1				秋の昼	2	爽やか	2	
	秋のおとずれ	1				秋の日	1	冷やか	1	
	水澄む	1				秋の空	2	名月	1	
	酸橘	1				秋風	3	蟪蛄	5	
	木犀	1				秋晴	3	ばった	1	
						秋雨	1	蟋蟀	1	
						秋の山	1	松虫	1	
						秋の道	1	ひぐらし	1	
								秋桜	4	
								木犀	1	
								露草	1	
								渋柿	1	
								団栗	2	
								銀杏	1	
								草の実	1	
							涼風	1		

前では、鶴林寺が5句、焼山寺が3句、地藏寺が2句で、それぞれ取り入れられていた。霊山寺、極楽寺、安楽寺、藤井寺、太龍寺も、それぞれ1句ずつで取り入れられていた。霊山寺、極楽寺は、それぞれ1番札所、2番札所であることから、最初の印象の強さや記憶に残りやすさが示唆され、スタート地点での意気込みなどが詠まれていた。地藏寺（じぞうじ）が2句詠まれたことには、ほとんどが五音であるなかで、この寺の名前だけが四音であることと関連があるかもしれない。「遍路ころがし」といわれる焼山寺や、鶴林寺、それに太龍寺は山頂にある寺であり、覚悟、疲労、そして登り切った爽快感などが詠まれた。また、吉野川が8句で詠まれており、その印象深さをうかがい知ることができる。「秋風」などの季語と取り合わされ、その雄大な風景が詠まれている。さらに特筆すべきこととして、2009年度の宿泊先である民宿・坂口屋の名前が2句で取り入れられていることがあげられ、お接待という営みが詠み込まれていた。この点で、他の年度の宿泊先である安楽寺も詠まれていた。

Table 3 創作俳句の領域別個数および比率

領域	各領域の俳句の個数	各領域の俳句の比率 (%)
自然	319	53.2
文化	52	8.7
人間	229	38.2
合計	600	100

Table 4 人間領域俳句の下位領域別個数および比率

下位領域	各領域の俳句の個数	各領域の俳句の比率 (%)
自己対応	146	63.8
他者対応	63	27.5
状況対応	20	8.7
合計	229	100

その他、「四国みち」と「わしの里」を取り入れた作品が1句ずつあった。固有名詞を俳句に詠み込むことは入門者には難しいという説もあるが、地域を意識するという観点から、指導方法の考案が期待される。

**俳句の内容分析** 上記の分析方法により、対象作品600句の主題を自然、文化、人間の3種類に区分した（巻末資料1-1～3-3参照）。各領域に分類された俳句の個数とその比率を算出し、その結果をTable 3に示した。人間を主題とすると認定された俳句については、さらに、Emotional Intelligenceの概念に基づいて、自己対応、他者対応、状況対応という3つの領域に分類した。それぞれの領域に分類された俳句の個数とその比率を算出し、その結果をTable 4に示した。

Table 3に示すように、自然を主題とする俳句がもっとも多く、人間を主題とする俳句がこれに次いでいる。しかしながら、俳句の季語の多くが自然界のものである中で、これだけ多くの人間を主題とする俳句が得られたことは、注目に値する。歩き遍路をする人にとって、自然は気象条件などによりさまざまな状況をもたらす。遍路道には山道も多く、それぞれの状況への対応が求められる。また、俳句では、自然界に存在する生物を擬人化して詠み込むことも多く、他者対応における共感・協力・感謝の対象にもなったのではないかと考えられる。このような複眼的な分析・考察をすすめることにより、歳時記による区分では生活や行事に分類される直接的に人間に関わる季語で詠まれた俳句だけでなく、時候、天文、地理、動物、植物といった自然界の季語で詠まれた俳句についても、相当数、人間を主題とする作品として認定することができたと考えられる。このように、俳句に詠み込まれた対象、すなわち俳句の主題を自然、文化、人間の3種類に区分するだけでなく、さらにEmotional Intelligenceの概念に基づいて俳句の内容を分析することは、歩き遍路がもたらす感動の様相を明らかにするために大きく寄与するであろう。しかしながら、中には、2名の評価者間の一致が困難な部分もあり、このような観点から分類しきれないケースもあった。これらのことについて再度検討し、いっそう明確な評価基準を定めていくことを今後の課題とする。

人間を主題とする俳句の分析では、Table 4に示すように、自己対応領域の俳句が圧倒的に多く、本授業における歩き遍路が「自己を見つめる」という役割を果たしたことを明示している。多くの参加者の内省力・省察力の向上をもたらすことも作品の内容分析によって明らかとなった。そして、これらのことには、歩き遍路を体験するだけでなく、その感動を俳句によって集約して表現するという取り組みを付加したことが大きく寄与していると考えられる。省察力は教員に必要な資質・能力のなかでも上位に位置づけられていることから、上記の取り組みが教員養成大学における取り組みとして有用であることを実証したことにもなるであろう。しかし、中には理解の浅い参加者もいる。自己を見つめること（自己対応）はできていても、共感、協力、感謝といった態度（他者対応）に欠けている参加者もいる。場面や状況に合わせて適切に行動すること（状況対応）を可能にする力が身につけていないと思われる参加者は、いっそう多い。これらのことは、上記の俳句の分類比率に明確に表れていると考えられる。これらの点をふまえ、指導方法の改善に取り組みたい。このように問題点を明らかにできたことも、本研究の成果の一つであるといえよう。本論文における分析をとおして、遍路体験とその感動の表現から成る協同的な学びは、人間形成の基盤となることを確信した。本論文は2007年度から2009年度までの取り組みをまとめたものであるが、実際、この取り組みは2010年度以降も継続して実施されており、年度ごとに改善を加えてきている。そのことについては、その成果とともに、稿を改めて報告する。

歩き遍路を体験した学生は、感動を俳句で表現した。本研究では、歩き遍路を体験した学生による創作俳句を、Emotional Intelligence（島井・大竹，2001；皆川・片瀬・大竹・島井，2010）の概念に沿って分類・分析することを試みた。その結果、歩き遍路を体験し、その感動を俳句によって表現することで内省力、共感・協力・感謝といった態度、さらには場面や状況に合わせて行動する力も高まるようすがうかがわれ、歩き遍路という体験を俳句という表現形式によって印象づけるという取り組みによって、教員に求められる資質・能力の向上に結び

つく可能性が示唆された。遍路体験とその感動の表現から成る協同的な学びは、人間形成の基盤となるであろう。

## 引用文献

- 俳人協会 (2001). 学校教育と俳句 (社) 俳人協会.
- 皆川直凡 (2005). 俳句理解の心理学 北大路書房.
- Minagawa, N. (2008). Influence that familiarity level and the position of the cutting in the haiku gives to the retrieval process. Yoshizaki, K. and Ohnishi, H. (Eds.) Contemporary issues of brain, communication and education in psychology.
- 皆川直凡 (2011). 心理学からみた歩き遍路体験, その人間形成的意義 — 学生による創作は行くの内容・説明文と鑑賞文の分析から —. 鳴門教育大学研究紀要, 26, 35–42.
- 皆川直凡 (2012). 知性と感性を結ぶ協同的学習プログラムの開発 — 教育実践フィールド研究における協同を基盤として —. 鳴門教育大学授業実践研究, 11, 17–25.
- 皆川直凡・横山武文 (2013). 子どもの発達最近接領域を考慮した学習指導の在り方の検討 — 俳句をとおした感動・共感体験による季語への関心・知識の深まり —. 鳴門教育大学授業実践研究, 12, 19–27.
- 皆川直凡・片瀬力丸・大竹恵子・島井哲志 (2010). 児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 鳴門教育大学研究紀要, 25, 31–37.
- 皆川直凡・正岡繁豊 (2008). 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価 — 話し合いを円滑に進める要因の分析 —. 日本教育心理学会第50回大会発表論文集, 185.
- 佐々木智美・皆川直凡 (2013). 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析 — 自伝的記憶としての感動体験 —. 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 10, 21–28.
- 島井哲志・大竹恵子 (2001). 情動知能: その概念, 評価方法と応用の可能性 神戸女学院大学論集, 48, 159–173.
- 戸梶亜紀彦 (2001). 『感動』喚起のメカニズムについて. 認知科学, 8, 360–368.
- Tokaji, A. (2003). Research for determinant factors and features of emotional responses “kandoh” (the state of being emotionally moved). Japanese Psychological Research, 45, 235–249.

## 謝 辞

学生の皆さんが課題に真剣に取り組み、余情にあふれる俳句を創作してくれたことにより、本研究を行うことができました。引用させていただいた俳句には作者の氏名を付記させていただき、感謝の意を表します。



資料1-1 「自然」を主題とする俳句1 (時候, 天文, 地理)

No.	年度	俳句	作者	種別
4	2007	水澄んで魚が跳ねる吉野川	井上義丸	地理
10	2007	秋の昼日陰で涼むへんろ道	木村俊宏	時候
11	2007	川沿いに吹く秋風の爽やかさ	木村俊宏	天文
15	2007	ふりむけば塔を抱いた秋の山	岩田将英	地理
19	2007	へんろ道汗といっしょに見る彼岸	西川栄展	時候
21	2007	名月も見守るかげの遍路道	平野達也	天文
23	2007	石段を昇った先に秋の山	府木晃二	地理
34	2007	悠々と水面を泳ぐ鰯雲	喜多佳英	天文
43	2007	秋晴に財布も干上がる遍路道	隅田恵介	天文
45	2007	山道の森の切れ間に秋の空	古谷亨仁	天文
53	2007	旅立ちを見送る朝の白い月	松本真由美	天文
59	2007	秋暑し力みなぎる冷たい水	本村芳典	時候
64	2007	キラキラと川の水澄む遍路道	山崎高裕	地理
65	2007	吉野川水面に映る秋の色	田川孔明	地理
67	2007	秋の山に彩り添える雲の影	田川孔明	天文
68	2007	澄み渡る秋空へ向け手を伸ばす	矢野博幸	天文
78	2007	秋の昼寝より楽はなかりけり	長井志保	時候
95	2007	遍路道川べりを吹く秋の風	平村佳子	天文
98	2007	秋風は歩き遍路をいやす風	山崎正史	天文
102	2007	秋風が水面を走る吉野川	吉田哲也	地理
106	2007	遍路道ゆっくり流れる鰯雲	藤本美恵子	天文
108	2007	川渡る秋風涼し遍路道	河野礼子	天文
109	2007	秋の山果てなく続く岩階段	河野礼子	地理
111	2007	吉野川清き流れが秋はこぼ	武知将人	地理
120	2007	秋の山並んだ顔も赤くなる	山本晃大	地理
124	2007	川橋で高く見上げし秋の空	伸二見和恵	天文
134	2008	朝寒に目がさめたるは我一人	吉田英司	時候
137	2008	秋風が行く方向に鶴林寺	吉田英司	天文
147	2008	せせらぎの水澄む流れ爽やかに	升本絢也	地理
153	2008	秋雨や明けの遍路路濡らしつつ	前田大地	天文
156	2008	秋晴し険しき遍路いずこへと	松永達矢	時候
160	2008	秋晴れを隠して険し峠かな	福井寛朗	地理
161	2008	遍路道のぞむ景色に秋を見る	福井寛朗	時候
175	2008	峠越え笠を吹き行く秋の風	田中義人	天文
177	2008	秋雨や札所包めり山の朝	長島和子	天文
182	2008	遍路道歩く距離だけ日焼け肌	小栗和彦	時候
188	2008	遍路道真っ赤に染める秋の暮	金平健太	天文
199	2008	秋の空見上げて歩く遍路道	長瀬有希	天文
205	2008	秋の風ほてった体をアイシング	古川聖翔	天文
211	2008	霧の中かすかに聞こえる清流の音	寺岡 桂	地理
213	2008	遍路道残暑厳しく日に焼けて	佐藤健士郎	時候
227	2008	歩き行く夏とは違う秋風と	永吉さゆり	天文
231	2008	清流におぼろにうつる秋の暮れ	朝倉勇太	地理
236	2008	さらさらと落ち葉流るる秋の川	小崎記子	地理
237	2008	川沿いに涼しく吹くのは秋の風	小崎記子	天文
243	2008	感じとる秋のおとずれ遍路道	喜多裕美子	時候
247	2008	秋の暮れ道と私と虫の声	田中宏明	時候
250	2008	さやさと水澄む川の下山道	平奈緒子	地理
258	2008	爽やかな風が過ぎゆく遍路道	内藤友香	天文
267	2008	残暑かな背中にしたたるじんわりと	長屋祐也	時候
273	2008	ふと休み見上げてみれば鰯雲	蟻井美美	天文
281	2008	初歩き残暑厳しくへばってる	花房良樹	時候
285	2008	秋の風金の稲穂を翔け抜ける	阿部辰平	天文
287	2008	秋暑し汗がとまらぬ僕の腕	坂根拓実	時候
295	2008	秋風や涼やかに吹き熱さます	松本 香	天文
296	2008	秋晴の出発空に白い月	四間有希	天文
303	2008	透明の色を感じた秋の朝	大塚芽衣	時候
304	2008	まだ暑いそう思っても虫の声	大塚芽衣	時候
321	2008	身に染みて感じる秋風青い空	土江 緑	天文
325	2008	秋遍路永く険しいのぼり坂	田村和文	地理
328	2008	秋の風揺らしているよ黄金色	坂東郁代	天文
330	2008	秋の日に照らされ残る紅い跡	鎌田友希恵	天文
332	2008	爽やかに風吹き抜ける焼山寺	鎌田友希恵	天文
333	2008	秋浅し趣き深し暮れ空の	山内伸一郎	時候
339	2008	秋の朝爽やかな風吹き抜ける	宮部美里	天文
346	2008	歩くたび風情変わりし秋遍路	西原寛喜	時候
347	2008	冷やかな風が吹きける遍路道	西原寛喜	天文
350	2008	秋の空映し出される水面かな	新宮聖子	地理

No.	年度	俳句	作者	種別
354	2008	秋の山仏は味方かいい敵か	濱田真理子	地理
355	2008	初遍路心洗わる秋の風	信東今日子	天文
357	2008	いわしぐも疲れた体で飛び込みたい	信東今日子	天文
364	2008	草々がゆれて音出す夜長かな	道上宏美	時候
367	2008	いつか見たあの日と同じ秋の空	谷 沙織	天文
374	2008	山の中脇から「しみでる水は澄む	和佐実希子	地理
377	2008	汗ぬぐう歩きへんろ爽やかに	伊藤千裕	時候
379	2008	爽やかな風を背中に遍路道	泉佐也加	天文
382	2008	秋の道どこまで続く遍路道	清水場雅和	地理
384	2008	冷ややかに肌身に染みる朝の風	井出和宏	天文
385	2008	秋の川落ち葉が流れうつくしい	井出和宏	地理
386	2008	秋の山夕日で赤く染まってる	井出和宏	地理
388	2008	秋の夜風あたりが気持ちいい	岡野勇貴	天文
390	2008	秋の夜昼の暑さはどこへやら	日置宏一郎	時候
392	2008	秋の道色とりどりであうつくしい	日置宏一郎	地理
393	2008	秋の昼まだまだあついへんろ道	宮前壮志	時候
402	2008	天高く風吹き抜ける秋の空	細路亜矢	天文
406	2008	額汗ぬぐって見れば秋の空	三谷友里江	天文
407	2008	爽やかな風に吹かれて秋遍路	酒巻有希	天文
408	2008	鰯雲明日もきつといい天気	酒巻有希	天文
410	2008	残暑ゆえ遍路に残るは疲労だけ	岡田彩那	時候
426	2008	すき通る心とぎやくの深い霧	高津友里	天文
427	2008	秋が来た明日の朝には出発だ	井上和哉	時候
428	2008	秋風が心地よく吹く遍路道	井上和哉	天文
442	2008	冷やかな夜風にあたる散歩道	岡田亜弓	天文
448	2008	延々と同じ風景秋の田	中根一弥	地理
449	2008	秋の山時折見せる絶景たち	中根一弥	地理
451	2009	白い霧景色をたてる鶴林寺	藤井翔平	天文
456	2009	秋遍路見渡す限り霧の森	大谷祐介	天文
457	2009	秋の山先の見えない霧の道	濱田剛史	天文
467	2009	大自然爽やかな風吹きぬぐる	佐藤泰輔	天文
471	2009	雨上がり暑さが残る秋の道	古川 武	天文
482	2009	しらぬ間に涼しさ漂う秋の山	中原裕貴	地理
484	2009	霧の中木漏れ日が指す秋遍路	川人由佳	天文
487	2009	急な坂絶景見渡せ爽やかに	矢野由姫	時候
489	2009	秋遍路風心地よい鶴林寺	山崎武彦	天文
496	2009	月見えず電灯うかべる水たまり	谷崎元気	地理
507	2009	秋の山木々の間に間にこもれ日だ	大西裕子	地理
508	2009	遍路道落葉すべらす秋の雨	大野聡子	天文
509	2009	鶴林寺行きも帰りも秋の雨	十川彩香	天文
515	2009	秋の水さらさら流る山の道	小池祥子	地理
516	2009	雲間からきらきら光る秋の雨	小島美咲	天文
518	2009	霧の中せんにんじいさんできそう	大野木結花	天文
522	2009	さまざまに姿を変えた秋の空	早瀬仁美	天文
525	2009	秋の空心変わりで天気あめ	高杉佳奈	天文
528	2009	竹林のすきまに見える秋の空	荒木萌美	天文
530	2009	秋山の歩きにくさに風情あり	森麻子	地理
533	2009	冷ややかに紅葉をゆらす秋の風	前田真菜	天文
535	2009	通る道季節を感じる秋遍路	小林弘樹	時候
537	2009	おみくじで大吉ひいて星月夜	森本晶子	天文
542	2009	秋の山心清らか自然の声	米田彩乃	地理
543	2009	秋の雨シャワーみたいで気持ちいい	井藤由季	天文
547	2009	秋雨の乾くヒマ無き遍路道	真嶋健司	天文
551	2009	さらさらと澄んで流れる秋の水	松川紀子	地理
554	2009	秋遍路眠気をさそう鰯雲	中井雄輝	天文
558	2009	秋の川きれいな水が流れてる	早瀬仁美	地理
559	2009	秋の山一本道は続いている	山路哲也	地理
563	2009	遍路道川流るる音冷やかに	古川 武	地理
572	2009	天高し見上げてみれば鰯雲	森下慶子	天文
577	2009	秋遍路流れる水が爽やかに	置塩沙織	地理
580	2009	暑いけど涼しさ香る秋の水	中原裕貴	地理
581	2009	秋の山耳をすませば水の声	北畑明日香	地理
583	2009	山道と時より忘れず秋の風	高田悠介	天文
584	2009	滝つぼや流るる清水と茂るこけ	岡崎洋亮	地理
585	2009	秋の川キラキラ光る宝物	川人由佳	地理
587	2009	遍路道乙女心の秋の空	斉官研斗	地理
592	2009	山道の地の色変える秋の雨	大鹿小百合	天文

資料1-2 「自然」を主題とする俳句2 (植物)

No.	年度	俳句	作者
6	2007	脇道に朱色添えたる彼岸花	井上義丸
16	2007	遍路する我にこうべを垂れる稲	岩田将英
18	2007	秋の陽が秋桜群にふりそそぎ	西川栄展
20	2007	銀杏のかおりに気づく遍路みち	平野達也
24	2007	旅人に秋を匂わず大銀杏	府木晃二
29	2007	遍路道黄緑色の稲穂かな	森明日香
32	2007	夕日差す畦に凜とし曼珠沙華	喜多佳英
36	2007	遍路道頭を垂れる稲穂かな	近藤由紀
37	2007	秋空の下昔知る大イチョウ	近藤由紀
41	2007	遍路道朱色が映える彼岸花	葛西礼子
44	2007	遍路道金に輝く稲の花	古谷亨仁
50	2007	彼岸花ほのかに匂ふ夢日和	河田知憲
54	2007	焼山寺後ももう少しと萩の花	松本真由美
60	2007	コスモスが声援送るあと少し	本村芳典
62	2007	秋茄子が残暑の中で輝くよ	山崎高裕
70	2007	薄紅の芙蓉の花の優しさや	矢野博幸
72	2007	銀杏の匂いにおされ道いそぐ	吉岡美香
73	2007	あれここに畦の道標ひがな	吉岡美香
77	2007	さらさらとコスモス畑死を想う	長井志保
79	2007	畦道で旅人迎える彼岸花	阿蘇波善明
81	2007	山肌の紅葉眺め息をのむ	阿蘇波善明
83	2007	行く人の姿も隠すすすきかな	阿部 靖
91	2007	洪柿の青目を引く遍路道	中西真理
99	2007	秋桜の香る側には遍路道	山崎正史
101	2007	極楽寺目ざすあぜ道ひがな	吉田哲也
103	2007	山間で幼き食べたあけびの実	吉田哲也
104	2007	コスモスの微笑みゆるる遍路道	藤本美恵子
121	2007	彼岸花赤く染まった田んぼ道	渡辺可奈
125	2007	旅人をそっと見送るすすきかな	仲二見和恵
138	2008	風吹いて静かに揺れるコスモスや	藤田彩菜
139	2008	誰のため赤く色付く彼岸花	藤田彩菜
149	2008	彼岸花赤くいろどる道するべ	平尾裕幸
151	2008	山の間に暑さに耐えるすすきかな	前田大地
154	2008	秋遍路とんぐりたちがお出迎え	松永達矢
165	2008	涼風や曼珠沙華さく里の道	池田一彦
173	2008	群れ咲きて遍路見守る彼岸花	田中義人
174	2008	伏した目に転がり入る青き粟	田中義人
181	2008	我々の道案内の彼岸花	小栗和彦
185	2008	ひがな遍路道にて咲き誇り	小島敏克
186	2008	遍路道我を見守る曼珠沙華	金平健太
206	2008	秋桜と揺れ動くのは恋心	古川聖翔
207	2008	秋の田は稲穂と虫の大合唱	西村かおり
209	2008	疲れてもふと視線ゆくひがな	寺岡 桂
216	2008	揺れながら待ち続けている秋の稲	山岸拓朗
222	2008	往來にまみえてゆるる紫苑かな	村井庸佑
225	2008	ふんわりとキンモクセイの香る秋	米田美沙紀
226	2008	露草に寒さ感じるへんろ道	米田美沙紀
228	2008	彼岸花遠めに見ると赤い雲	永吉さゆり
230	2008	青々と成る柿あるも散りゆく葉	朝倉勇太
238	2008	秋の稲道行く人におじぎする	酒井史貴
239	2008	銀杏が歓喜の秋に色付いた	酒井史貴
241	2008	彼岸花きれいに並ぶ秋の道	佐藤彩夏
246	2008	星月夜水面に映る曼珠沙華	田中宏明
249	2008	かくれ道さわだつ紅の曼珠沙華	平奈緒子
252	2008	曇天の心も白き曼珠沙華	吉川奈未
256	2008	お遍路の足下彩る曼珠沙華	斉藤成子
261	2008	秋桜の香りかくわし秋の風	藤井肯人
262	2008	紅葉をいまかいまかと待つ今日	藤井肯人
263	2008	すぎの木が秋の景色のジャマをする	増田 隆
268	2008	赤い花そよそよ揺れる秋遍路	長屋祐也
272	2008	畦道に彩り添える曼珠沙華	蟻井美美
275	2008	秋桜の花も美し遍路道	南光章史
276	2008	地藏寺の行く道おどる曼珠沙華	南光章史

No.	年度	俳句	作者
283	2008	秋草が色どり豊かに生えている	花房良樹
284	2008	赤紫赤白黄色草の花	阿部辰平
293	2008	青空に山を彩る曼珠沙華	松本 香
300	2008	行く道の足元に咲く曼珠沙華	萩原美香子
302	2008	遍路道彩り添える彼岸花	大塚芽衣
309	2008	山道に綺麗に映える曼珠沙華	藤川奈緒
311	2008	秋の風うけてはなびく曼珠沙華	住友千尋
315	2008	道端にたわわと実る柿の実や	井口真美
327	2008	遍路道風に揺れる彼岸花	坂東郁代
329	2008	秋遍路周りを見ると紅葉なり	坂東郁代
331	2008	緑日と並んで揺れる曼珠沙華	鎌田友希恵
345	2008	秋風でコスモスがほら揺れている	泉 杏子
348	2008	赤染まる夕日に当たりし白粉花	西原寛喜
356	2008	秋の田に一際目立つ曼珠沙華	信東今日子
359	2008	秋晴にやかましく鳴く稲穂かな	古角龍太
360	2008	燃ゆる陽に頭を垂れる彼岸花	古角龍太
361	2008	遍路道緑に燃ゆる彼岸花	寺本絵里
365	2008	秋桜とともに揺れるは恋ごころ	道上宏美
366	2008	肌寒さ身を寄せしのご稲穂かな	道上宏美
372	2008	一休憩秋桜広がる秋遍路	和佐実希子
375	2008	曼珠沙華故郷のあの道恋しくひほへる	宮内宏子
376	2008	踏みしめるへんろ路横彼岸花	伊藤千裕
378	2008	疲れ顔白粉花がほくを見る	伊藤千裕
389	2008	秋桜が楽しそうに咲いている	岡野勇貴
396	2008	草の実をふわりけとばす遍路道	野村優衣
398	2008	花の赤稲の黄色とハーモニー	野村優衣
400	2008	木犀の香りただよう遍路道	西岡奈美
401	2008	道端の木犀香る遍路道	細谷亜矢
405	2008	彼岸花熱く燃ゆるは恋心	三谷友里江
411	2008	まんじゅしゃげ赤しかななくて白さがす	岡田彩那
415	2008	あちこちに稲の穂たるる秋遍路	丹羽千聡
416	2008	彼岸花歩く私を見て見ぬふり	保海泰地
420	2008	しなやかな秋風が吹く稲穂道	内堀友寛
429	2008	道端で真っ赤に燃える彼岸花	井上和哉
431	2008	銀杏の雨に打たれた今日の午後	藤田裕貴
433	2008	秋の山草木の薫る遍路道	山村健介
436	2008	曼珠沙華はくらの足元でらして	川染克子
439	2008	香りでも姿は見えぬ金木犀	蘆原茜子
450	2009	秋晴れに雨露光る紅葉かな	荒木萌美
454	2009	香り立つ金木犀のオレレンジ	森本晶子
466	2009	山道にどんぐりころり秋の昼	富永結香
478	2009	彼岸花霧の向こうにきみ見行く	安井夕理
494	2009	帰り道あせた彼岸花さえ目にまぶし	佐野恭子
504	2009	山道でひっそり咲いてた彼岸花	中尾早葵
506	2009	秋の山紅葉という化粧かな	井藤由季
520	2009	秋遍路思わず止まる柿の木よ	置塩沙織
523	2009	遍路道赤く染め行く彼岸花	西坂 彩
524	2009	道端にほほえみのこす彼岸花	大鹿小百合
527	2009	彼岸花遠いふるさと思ひ出す	石川早紀
529	2009	秋の山栗がゴロゴロもったいない	佐藤泰輔
532	2009	彼岸花いつも笑顔でみつめて	窪美正一
539	2009	道端で拾った栗の皮をむく	北浦士頌
544	2009	秋桜を眺めて歩く遍路道	安藤恵里
561	2009	秋の雨滴と遊ぶ彼岸花	濱田剛史
568	2009	足止まる顔を上げると彼岸花	肥後明奈
569	2009	秋晴れの光求めて竹のびる	大西裕子
573	2009	秋遍路コスモス咲いた帰り道	小島美咲
576	2009	金木犀甘い香りの遍路寺	福良祐香子
586	2009	遍路道開けて見ゆる秋桜かな	戸川祐樹
589	2009	へんろ道空のいがぐり秋さそう	富永結香
591	2009	草の花ふまれてもなお美しく	東 泰暢
599	2009	道端で拾った栗を投げ飛ばす	河地純平

資料1-3 「自然」を主題とする俳句3 (動物)

No.	年度	俳句	作者
13	2007	この道と一緒に歩こう赤とんぼ	小林 徹
47	2007	蟻螂がとおせんぼする遍路道	江口正晃
49	2007	虫の声声援なのか説教か	江口正晃
61	2007	びよんびよんと跳ねる鈴虫先行くよ	本村芳典
63	2007	蟻螂と共に歩んだ遍路道	山崎高裕
70	2007	蟋蟀の応援うける遍路道	江口正晃
86	2007	バッタ飛ぶ道を歩いて秋を知る	勢造牧人
90	2007	蟻螂も思いにふける遍路みち	中西真理
94	2007	蟻螂の横切る道も遍路道	平村佳子
112	2007	かまきりに後ろ追われる遍路道	武知将人
113	2007	鈴虫の歌声響く夜更けかな	武知将人
123	2007	ばった飛び驚きころぶ遍路道	仲二見和恵
126	2007	かまきりに群れるありから命知る	小林建太
128	2007	かまきりが行く手をふさぐ山の道	佐藤文宣
131	2007	赤とんぼおまえも見るか遍路地図	高麗 裕
146	2008	秋の宿こねこが眠る廊下路	升本絢也
152	2008	舞い下りて森林浴か赤とんぼ	前田大地
162	2008	秋遍路踏み分け逃げる虫達よ	福井寛朗
193	2008	赤とんぼ山道いっしょに下ってく	鳥田晃良
201	2008	蟋蟀の鳴き声ひびく山の中	長瀬有希
215	2008	月の下重なり響く虫の声	山岸拓朗
220	2008	赤とんぼ群れをなしてこちら見る	斎藤秀平
232	2008	秋の山動物たちは冬支度	朝倉勇太
235	2008	秋茜群れに包まれ歩いてく	谷 和音
253	2008	秋の水堪えて揺る蜘蛛の糸	吉川奈未
254	2008	歩くたび横を飛び行く赤とんぼ	斉藤成子
260	2008	遍路道いくつ見たかな赤とんぼ	藤井肯人
269	2008	赤とんぼ秋空の下自由主義	山下ゆかり
280	2008	蟻螂がわが行く先をとうせんぼ	志智直人
282	2008	秋の田で音をかなでる虫の声	花房良樹
294	2008	我先に道案内する赤とんぼ	松本 香
299	2008	遍路道私を導く赤とんぼ	萩原美香子
306	2008	秋晴の空の色したとんぼの眼鏡	八田真奈
320	2008	歩いても追いつけないよ赤蜻蛉	大濱有加
334	2008	過ぎぬるは岩にしみ入る蟬の声	山内伸一郎
340	2008	涼しげに秋空泳ぐ赤蜻蛉	宮部美里
349	2008	秋風に誘われ集う赤とんぼ	新宮聖子
358	2008	赤蜻蛉稲穂に影をうつしけり	古角龍太
383	2008	秋の夜耳を澄ませば虫の声	清水場雅和
387	2008	赤とんぼうれしそうに飛んでいる	岡野勇貴
391	2008	赤とんぼ秋の始まり教えてよ	日置宏一郎
394	2008	へんろ道いっぱいいたね赤とんぼ	宮前壮志
395	2008	赤とんぼへんろの旅の仲間かな	宮前壮志
403	2008	あぜ道にふわりふわりと赤とんぼ	細峪亜矢
404	2008	鈴虫や静かに響く祈り声	三谷友里江
412	2008	遍路道終わるときも赤とんぼ	岡田彩那
414	2008	虫の声夜に響くよ秋の宿	丹羽千聡
419	2008	秋晴に塩辛とんぼ見つけたよ	酒井秀輔
422	2008	赤とんぼ日照りの中を共に行く	大嶺結子
430	2008	蟻螂が鏡相手ににらめっこ	藤田裕貴
432	2008	秋晴の空に架かりし雁の橋	山村健介
434	2008	秋の田の稲に群がる赤蜻蛉	山村健介
441	2008	ひらひらり舞い踊るのは赤蜻蛉	岡田亜弓
447	2008	赤とんぼ優雅に飛翔高架下	中根一弥
479	2009	雨上がり晴れ間のぞきて鳥渡る	戸川祐樹
485	2009	沢ガニも泥に塗れて秋遍路	高田美穂
493	2009	蛇やカニ我らを歓迎秋遍路	野崎朋美
503	2009	僕たちの歩みと同じかたつわり	山口友誠
541	2009	山中で松虫が鳴く遍路道	西坂 彩
596	2009	クワガタと一緒に歩む秋遍路	坂口聖徳

資料2 「文化」を主題とする俳句

No.	年度	俳句	作者	種別
35	2007	秋桜に見え隠れする道標	喜多佳英	生活
194	2008	稲刈って案山子の仕事も一休み	瀬部貴文	生活
200	2008	田の中にひっそりたたずむ案山子かな	長瀬有希	生活
255	2008	今時は 茶髪にけしょう 田の案山子	斉藤成子	生活
277	2008	遍路道遍路を見守る案山子かな	南光章史	生活
437	2008	ばあちゃんのおさがり着てる案山子かな	川染克予	生活
440	2008	学生を振り向き送る案山子かな	蘆原茜子	生活
495	2009	山けわし案山子見守る四国みち	東 泰暢	生活
588	2009	僕たちを陰から応援田のかかし	山口友誠	生活
178	2008	秋澄みて海辺の町のみやげ売り	長島和子	観光
51	2007	遙かなる時空越え歩む秋遍路	河田知憲	行事
66	2007	喧噪と静寂奏でる秋遍路	田川孔明	行事
324	2008	山登る頂上着けば秋遍路	長岡鷹太	行事
25	2007	夕飯の膳の上には秋の色	府木晃二	食物
28	2007	ふかし芋歩く我らのエネルギー	篠原健真	食物
93	2007	秋の宿そば米ぞうすい舌つづみ	中西真理	食物
195	2008	遍路道イモに群がる人々よ	瀬部貴文	食物
229	2008	銀杏の香りで一杯飲めそうだ	永吉さゆり	食物
242	2008	食卓のすだちが香り食そそる	佐藤彩夏	食物
305	2008	食べたいなイネ見ておもふにぎりめし	八田真奈	食物
313	2008	道ぞいに売ってる酸橘いと安し	廣瀬恵恵	食物
326	2008	秋の夜野菊と鮭と白米と	田村和文	食物
368	2008	すっぱさが疲れを癒す酸橘かな	谷 沙織	食物
373	2008	道沿いに干柿広がる秋だなあ	和佐実希子	食物
531	2009	爽やかなすだちの香り晚ごはん	中尾早葵	食物
570	2009	とろろ汁すだち里芋坂口屋	森口伸彦	食物
582	2009	秋風に吹かれて匂うはカレーかな	渡辺 到	食物
22	2007	遠くには過ぎたお寺のあき姿	平野達也	寺社
69	2007	光差す山門仰ぐ秋の朝	矢野博幸	寺社
444	2008	風の音と銀杏香る地藏寺	酒井 剛	寺社
453	2009	秋の山聳え立つのは鶴林寺	北村政大	寺社
540	2009	秋風と歓喜の鐘か太龍寺	谷崎元気	寺社
30	2007	空海の道から望む秋景色	森明日香	信仰
82	2007	彼岸花咲きし野道に地藏かな	阿部 靖	信仰
88	2007	爽やかに鈴の音響く遍路杖	鈴木美香	信仰
107	2007	秋風とつえをお供に遍路道	河野礼子	信仰
114	2007	へんろみちおじぞうさんと赤とんぼ	木村光二	信仰
117	2007	空海に思いをはせる秋遍路	木村光二	信仰
132	2007	秋暑し優しく迎える仁王様	高麗 裕	信仰
135	2008	こつこつと音をたて行く秋遍路	吉田英司	信仰
136	2008	お大師も見たであろう曼珠沙華	吉田英司	信仰
143	2008	遍路道虫と杖の音響いてる	白川恭久	信仰
157	2008	秋風や路傍にたたくむ遍路墓	桑原光章	信仰
169	2008	彼岸花哀しさ染める遍路墓	三浦典和	信仰
234	2008	白装束想いを乗せた秋の山	谷 和音	信仰
248	2008	秋遍路歴史をきざむ木と道と	田中宏明	信仰
307	2008	秋遍路マトウギソワカ唱えつつ	藤川奈緒	信仰
464	2009	先人の道を踏みしめ秋の山	木津大佑	信仰
474	2009	秋遍路落つる涙は空海の	中井雄輝	信仰
514	2009	空海と初秋の風に背を押され	浅野早紀	信仰
557	2009	秋遍路道々金剛杖の跡	高田美穂	信仰

資料3-1 「人間」を主題とする俳句1 (自己対応領域)

No.	年度	俳句	作者
2	2007	秋桜やつかれ忘れるこの一瞬	正岡繁豊
3	2007	秋高しゴールを誓う霊山寺	正岡繁豊
7	2007	秋澄んで目指す目標まっすぐに	北口真也
8	2007	曼珠沙華みつけて強むわが一步	北口真也
9	2007	登りきり頬なで癒す秋の風	北口真也
14	2007	秋遍路歩き疲れて旅の宿	小林 徹
26	2007	秋暑し入りたくなる吉野川	篠原健真
27	2007	秋風に心も体も癒される	篠原健真
31	2007	吉野川風爽やかに足運ぶ	森明日香
33	2007	秋遍路歩をゆるめれば風わたる	喜多佳英
37	2007	秋の香と一緒に渡る吉野川	近藤由紀
39	2007	秋遍路思いを馳せて歩いてく	葛西礼子
42	2007	秋遍路出会いが変える憂き我	隅田恵介
48	2007	秋風に後押しされて歩く道	江口正晃
55	2007	秋晴れにさあ出発だ霊山寺	松本真由美
57	2007	秋桜にふるさと重ね足軽く	三木優子
76	2007	忘れてた童心戻す秋遍路	野中 惇
80	2007	足を止め見上げて和む鱗雲	阿蘇波善明
85	2007	冷やかな風吹く橋で一休み	勢造牧人
87	2007	秋の山歩か厳しき思い知る	勢造牧人
96	2007	忙しい日々を忘れて秋遍路	古市和臣
97	2007	今日もまた遍路の道へ秋の朝	古市和臣
100	2007	秋の川横切る先に達成感	山崎正史
105	2007	秋風が疲れた癒す遍路道	藤本美恵子
119	2007	虫の声休む時しか聞こえない	山本見大
127	2007	地図に無き我行く道が秋遍路	小林建太
129	2007	足をもみ疲れをいやす秋の夜	佐藤文宣
130	2007	秋草に力をもらい歩む道	高麗 裕
140	2008	秋遍路思いを馳せて踏みしめる	藤田彩葉
148	2008	登り道つくつくぼうし背中おす	平尾裕幸
155	2008	秋の風遍路のきつさやわらげる	松永達矢
158	2008	清流に心を癒す秋遍路	桑原光章
159	2008	波うちて旅路のおくり秋の浜	桑原光章
163	2008	秋の宿疲れをいやすわしの里	国田恵理
166	2008	言霊に励まされつつ秋遍路	池田一彦
167	2008	顔上げて秋空を見る三日目	池田一彦
168	2008	涼風に若返るおもしろい遍路道	三浦典和
170	2008	不惑にて自分を見つめ秋遍路	大石博明
171	2008	秋風に吹かれたときにかえりみる	大石博明
183	2008	ひぐらしの声があと押す遍路道	小栗和彦
184	2008	秋遍路札所参りをこころむに	小島敏克
189	2008	あくせくと必死に歩く秋遍路	高山夏美
190	2008	虫の声遍路を歩く憩いかな	高山夏美
191	2008	青い柿トマトと思い恥かいた	島田晃良
192	2008	あるときかかしにびびりハツとする	島田晃良
198	2008	秋桜が疲れた心いやすんだ	伊原智子
202	2008	苦しみも独りではない曼珠沙華	久保晶子
203	2008	頑張れと囁く風の爽やかに	久保晶子
204	2008	意味無意味己に問う旅秋遍路	久保晶子
208	2008	秋遍路大自然にい迷われ	西村かおり
212	2008	初遍路たどりつく先秋の宿	佐藤健士郎
214	2008	秋の風吹けよ吹けよと祈る道	佐藤健士郎
217	2008	秋遍路自分を探しに歩き出す	大石藍子
218	2008	秋桜が笑ってくれて頑張れる	大石藍子
219	2008	山道を登った心は秋の空	大石藍子
221	2008	秋遍路疲れた足で下る坂	斎藤秀平
223	2008	愁うとはなるほど秋の心なり	村井庸佑
224	2008	鱗雲気持ち新たに進む道	米田美沙紀
233	2008	曼珠沙華 私を抱く やわらかに	谷 和音
251	2008	晴れやかな 心と空の 秋遍路	平奈緒子
257	2008	歩きつつ 桃食べたいと 訴える	内藤友香
259	2008	歩を進め 水澄むように 心澄む	内藤友香
264	2008	秋へんろ 虫と風と 僕の声	増田 隆
265	2008	秋へんろ はりきりすぎて 筋肉痛	増田 隆
270	2008	遍路道心やすらぐ曼珠沙華	山下ゆかり
271	2008	旅終盤水澄む川に心が踊る	山下ゆかり
278	2008	秋の灯がやさしく我を包みこむ	志智直人
279	2008	秋の日の残る暑さと長い距離	志智直人
286	2008	秋遍路歩き疲れて飯うまい	阿部辰平
288	2008	秋風を背中に感じただ歩く	坂根拓実
292	2008	遍路道途中あきらめ秋の宿	山添将徑
297	2008	秋遍路これが一番風呂タイム	四間有希
301	2008	鳥渡る空を見上げてひたすら歩く	萩原美香子

No.	年度	俳句	作者
308	2008	秋の風疲れた体に心地よい	藤川奈緒
310	2008	秋の風髪をなびかせ背中押し	住友千尋
316	2008	ひたすらに足を運ぶ曼珠沙華	井口真美
318	2008	秋の風歩く私の背中押し	大濱有加
322	2008	秋晴れに心も晴れる遍路道	土江 緑
335	2008	移りゆく心も揺れる秋の風	相知美佳
336	2008	秋晴れや今後の道を夢想せむ	相知美佳
337	2008	あちこちに痛み現わる秋遍路	相知美佳
338	2008	遍路道心を癒す彼岸花	宮部美里
341	2008	爽やかな追い風吹いて足進む	八木まどか
342	2008	果てしなく登り続ける秋の山	八木まどか
343	2008	蟋蟀も応援するよ秋遍路	八木まどか
352	2008	負けないぞ踏ん張り勝負蠅螂と	濱田真理子
369	2008	いつまでも決して忘れぬ秋遍路	谷 沙織
370	2008	秋の空見上げて休みまた一步	二見梨奈
371	2008	秋の水心いやされふと笑顔	二見梨奈
397	2008	まだ青い私のような柿の実よ	野村優衣
399	2008	秋風が疲れた私そっとおす	西岡奈美
417	2008	秋の空小さな己を見つめなおす	保海泰地
418	2008	星月夜我が人生を考える	保海泰地
425	2008	赤とんぼ迷う私の道しるべ	高津友里
435	2008	てくてくと歩くと楽しい秋遍路	川染克予
443	2008	いつまでも心の中に秋遍路	岡田亜弓
445	2008	秋の山歩いてやっと藤井寺	酒井 剛
446	2008	足豆と思いい残った秋の道	酒井 剛
452	2009	秋雨に打たれながらの武者修行	本田翔大
455	2009	秋の野を足取り軽く歩み行く	安藤恵里
459	2009	秋遍路気付くと聞こえる虫の声	斉官研斗
461	2009	遍路道身近に感じた秋の季語	森口伸彦
463	2009	混ざり合う 心の涙と 秋の雨	米田彩乃
468	2009	秋遍路今の自分をうつつしだす	青木大輔
469	2009	いざ行かん山頂目指し秋の山	服部琢馬
472	2009	空気吸う心うらおう秋遍路	須山 準
473	2009	辛さをも忘れさせる秋の空	別所康二
475	2009	秋遍路歴史感じて通る道	丸山博史
477	2009	秋遍路重ねて歩くわたし路	曾根 恵
486	2009	秋の風ふくたび心いやされる	梅井朋子
488	2009	秋雨は踏み込む足に力増す	宇野かおる
490	2009	秋遍路まめがつぶれて彼岸花	岡崎洋亮
491	2009	秋の雨試されている私の覚悟	松川紀子
492	2009	秋遍路 上り下りは 人生路	窪美正一
497	2009	秋遍路だけど登りは夏遍路	大塚美雪
498	2009	秋遍路足の痛みにうちかつた	石川早紀
499	2009	秋遍路つらさを知った一日目	芦原慎平
500	2009	秋の空今日の夕食なんだろう	坂東康行
501	2009	秋の雨蒸し蒸し僕を苦しめる	高橋哲也
502	2009	秋遍路下ばかり見るつらし時	真嶋健司
513	2009	秋遍路汗水流して前進む	北畑明日香
517	2009	露草と汗に光る秋遍路	高橋実咲
519	2009	秋の雨風の声は秋模様	森下慶子
534	2009	秋の暮バスを尋ねて三千里	矢野将啓
536	2009	秋遍路季節豊かに我を待つ	上野友寛
538	2009	秋の山バス見てさわぐ秋遍路	阿部剛士
545	2009	秋の雨ただ黙々と進み行く	野崎朋美
546	2009	秋の昼末吉引いてありがたう	梅井朋子
548	2009	遍路道どんぐりみたいにかげ降りる	浅井 歩
549	2009	秋の空目指して歩く遍路道	高野由姫
550	2009	爽やかな水の流れに何想ふ	矢杉佳奈
552	2009	一生分歩いた気がする秋遍路	芦原慎平
553	2009	秋の歩も秋の食事も酸い甘い	浅野早紀
555	2009	空も見ず木の実も拾わず先急ぐ道	佐野恭子
556	2009	知らぬ間に澄んだ心と秋の空	高橋実咲
560	2009	山寺の鐘の音めざし秋遍路	山崎武彦
562	2009	秋の夜歩いたつかれをとる布団	青木大輔
564	2009	すがすがし 上がった秋雨坂口屋	本田翔大
565	2009	杖のへり共に歩んだ秋遍路	宇野かおる
566	2009	目的地近づくたびに秋気澄む	大野聡子
575	2009	秋遍路バスの姿が待ち遠し	木津大佑
579	2009	秋遍路ひたすら歩き豆ばかり	大谷祐介
593	2009	秋晴れに見とれて歩きつまづく私	大塚美雪
594	2009	お遍路を見守り続ける案山子かな	別所康二
597	2009	秋遍路旅の迷いは心の迷い	服部琢馬
600	2009	秋遍路歩いて燃やしてダイエット	坂東康行

資料3-2 「人間」を主題とする俳句2 (他者対応領域)

No.	年度	俳句	作者
1	2007	稲穂の香あぜ道響く友の声	正岡繁豊
5	2007	遍路道耳を澄ませば虫の声	井上義丸
12	2007	秋遍路故郷を想い友だちと	小林 徹
40	2007	秋遍路声を掛けあい歩いてく	葛西礼子
46	2007	秋遍路疲れ忘れるお接待	古谷亨仁
52	2007	仲秋の心にしみる笑顔かな	河田知憲
56	2007	秋遍路口数減りゆく五人衆	三木優子
58	2007	さつまいも子に伝えたい母の味	三木優子
71	2007	船頭の舵取る腕に吹く秋風	矢野博幸
74	2007	秋遍路接待受けて陽和らぐ	野中 惇
75	2007	石段で肩を貸し合う秋の旅人	野中 惇
84	2007	てくてくと歩く人影秋の風	阿部 靖
89	2007	秋遍路出会う優しさ思い出に	鈴木美香
92	2007	澄み渡る人の心と秋の空	中西真理
110	2007	秋の山交わす言葉に頬ゆるむ	河野礼子
118	2007	残暑道心にしみるおせったい	木村光二
122	2007	君想い秋桜揺れる淡い恋	渡辺可奈
133	2007	陽をつれて仲間とともに秋遍路	高麗 裕
141	2008	わが友と歌いたくなった秋遍路	山本崇文
142	2008	成長を祈るきもちが秋を呼ぶ	山本崇文
144	2008	一人よりみんなで歩く秋遍路	白川恭久
172	2008	先人も立ちどまったろう秋景色	大石博明
176	2008	曼珠沙華倒れへんろの命かな	長島和子
179	2008	秋遍路おばあ様の優しさ安楽寺	松田伸吾
180	2008	星月夜坊主の話が身にしみる	松田伸吾
187	2008	秋の山前も後ろもお遍路さん	金平健太
196	2008	秋遍路君と歩いたあの小道	伊原智子
197	2008	疲れはて二人見上げた秋の空	伊原智子
210	2008	秋遍路増える番号と友達の輪	寺岡 桂
240	2008	秋遍路あいさつすれば笑顔咲く	酒井史貴
244	2008	秋の夜響き渡る話し声	喜多裕美子
245	2008	友たちと絆深まる秋の山	喜多裕美子
266	2008	町並みに心を感じるさつまいも	長屋祐也
274	2008	仲間との絆感じる秋遍路	蟻井美美
289	2008	仲間たちと励まし合った秋遍路	坂根拓実
290	2008	これからは人のためにと秋の空	山添将径
291	2008	秋の日に人の優しさかみしめる	山添将径
298	2008	やさしさが心にしみる秋の道	四間有希
314	2008	友だちと励まし歩く秋遍路	廣瀬智恵
319	2008	ネェさんと2人で歩く秋遍路	大濱有加
323	2008	出会いあり笑顔あふれる秋遍路	土江 緑
344	2008	人々の優しさ溢れる秋遍路	泉 杏子
351	2008	秋遍路人の優しさ身にしみて	新宮聖子
353	2008	さわやかにあいさつ交わす秋遍路	濱田真理子
362	2008	秋の田にとんぼと潜むカメラマン	寺本絵里
363	2008	案山子かなと思いきやおじいさん	寺本絵里
380	2008	月見つつ君を重ねる秋の夜長	泉佐也加
381	2008	かかし見て思い出すのは母の顔	泉佐也加
409	2008	星月夜眺めて思う友の顔	酒巻有希
413	2008	秋の日にみんなで歩く遍路道	丹羽千聡
421	2008	友達と汗と痛みと秋遍路	大嶺結子
423	2008	秋の山友の支えで動く足	大嶺結子
424	2008	秋晴れに友と歩んだ道越えて	高津友里
483	2009	励ましの声轟いて秋遍路	三宅裕子
511	2009	栗拾い夢中になってた南先生	阿部剛士
521	2009	秋の宿笑顔とご飯でお接待	浅井 歩
526	2009	友共に続く足音さわやかに	森 千貴
567	2009	友と行き案山子を笑う秋遍路	矢野雅彦
571	2009	秋遍路かさなる足跡山の道	曾根 恵
574	2009	秋晴で友と歩む遍路道	藤井翔平
578	2009	秋気澄む人の出会いの間に間に	小池祥子
595	2009	秋の野のかかしを見ては祖母思う	安井夕理
598	2009	秋遍路みんなの声が力に変わる	十川彩香

資料3-3 「人間」を主題とする俳句3 (状況対応領域)

No.	年度	俳句	作者
17	2007	身をかかめ酸橋をくぐる遍路道	岩田将英
38	2007	曼珠沙華抜けて歩けば焼山寺	近藤由紀
145	2008	秋遍路木の葉に滑り困難や	升本絢也
150	2008	戻り道酢橋をかすめバス通る	平尾裕幸
164	2008	団栗に足をとられる遍路道	国田恵理
312	2008	疲れても話題をくれる彼岸花	廣瀬智恵
317	2008	先見えぬ道なき道と秋の風	井口真美
438	2008	団栗をたどりつ歩く遍路道	蘆原茜子
458	2009	秋遍路歩きつかれて木の下に	河地純平
460	2009	秋遍路こけ岩滑る下り坂	矢野将啓
462	2009	秋遍路足元悪く水ぶくれ	小林弘樹
465	2009	雨が降り軒にてかわす秋遍路	矢野雅彦
470	2009	歩き道邪魔をするのは栗の毬	渡辺 到
476	2009	月隠れ明日も降るかとカップ干す	森麻衣子
480	2009	雨模様冷たく刺さる栗のいが	上野友寛
481	2009	石がぬれ足をすべらす秋の雨	福良祐香子
505	2009	秋遍路濡れた落葉に足とられ	前田真菜
510	2009	山道がよく滑るよ秋遍路	北浦士頌
512	2009	晴れに雨足どり変わる秋の空	肥後明奈
590	2009	遍路道花咲く笑顔と秋桜と	三宅裕子

**The effect of the being deeply impressed with the Aruki-henro experience on a human development : Examined by analyzing scene images and an author's feeling described in 600 haiku poems composed by university students that participated in Aruki-henro**

MINAGAWA Naohiro\* and SASAKI Tomomi\*\*

The 240 University students that participated in Aruki-henro expressed their own impression by writing Haikus, a Japanese poem of seventeen syllables. This study examined quality of the being deeply impressed with the Aruki-henro experience by analyzing scene images and an author's feeling described in 600 haiku poems composed by university students that participated in Aruki-henro. In this study, we used the theory of a emotional intelligence as reference. This study proved that collabolative learning, consisting Aruki-henro experience and expression of the impression acquired by that experience, will form the foundation of human development.

---

\*Department of Human Development, Naruto University of Education

\*\*Center for the Science of Preventive Education, Naruto University of Education